

マーシャル諸島は快晴が続いております、皆様いかがお過ごしでしょうか？
マーシャル平和新聞では日野市より平和活動推進補助金の交付を受けて、明星大学竹峰ゼミの学生が、マーシャル諸島の歴史や文化を、そして“核と平和”についてグローバルな視点から、実際にマーシャル諸島へ渡った体験をもとにお届けします。第二回は平和に向けて活動する人々との交流をメインにご紹介致します。

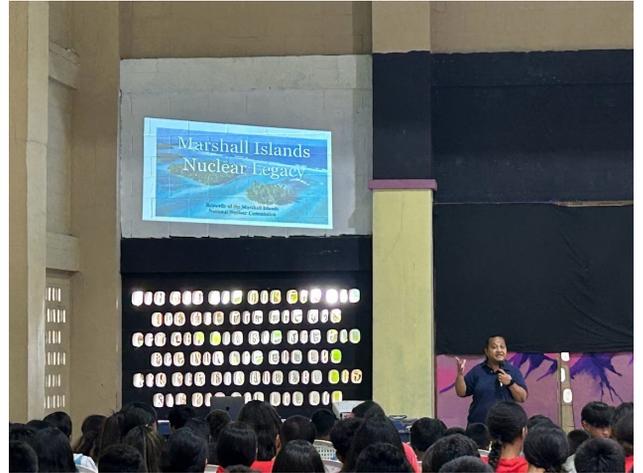
CONTENTS

- ◆小学生への特別授業
- ◆大学生交流会
- ◆Nuclear club アート展示
- ◆3.1Exhibition
- ◆ギャラリー
- ◆マーシャル諸島新聞vol.3予告

小学生への公開特別授業

未来を担う若者へ、エヴェレンさんが行うマーシャルの特別授業。

“平和学習”という日本人の多くが思い浮かべるのは、広島・長崎の原爆や東日本大震災などではないだろうか。同じように、マーシャル諸島でもビキニの水爆実験やそれによる様々な影響について学ぶ機会が設けられている。今回の対象者は、マジュロの複数の小学校から4～6年生が集められた。マーシャルには歴史が書かれた分厚い教科書が存在するが、その全てを必ずしも学習するわけではないのだという。また、こうして被害の歴史を学ぶ機会がかつては設けられていなかったという。授業後の小学生たちは、「自身の現状やこれからについて考えさせられた」など様々な感想を寄せた。



↑2024/02/27 授業中のエベリンさんと真剣に話を聞く小学生

大学生交流会

マーシャル、フィジー、アーカンソー、日本の学生が核や興味分野についてプレゼンテーションを行いました。



↑2024/02/28 CMIにて交流会の様子

ザ・マーシャル・アイランズ大学（以降CMI）にて核問題に対して関心の持つ学生が集まり、学生の活動や思いについて交流会を開催。CMIはマー

シャル諸島、首都マジュロの唯一の大学である。Nuclear Clubと呼ばれる核問題に関心のある学生が学ぶ日本で言う研究室がある。交流会では学生が核問題に対する思いを歌で表現す場面や映像で表現するといった活動も見られた。それぞれの発表のあとに質疑応答の時間が設けられ、「福島の水処理水の処理水の問題について日本人はどのように思っているのか」「他の問題と関連付けて考えることはないのか」というような、核の被害に合っているにも関わらず、一部でしか動きの見られない日本に疑問を抱いているというような声が多数寄せられた。日本人の他人事感・政治・教育システムなどの問題に触れながら意見を交換する中でこの質問を現地の人々から聞くことでまた、問題への向き合い方について考えさせられた。

Nuclear Club アート展示

CMIの学生が核と平和を考える、アート展示に参加。



↑2024/02/29 展示会の様子

Nuclear Clubの学生が主催したCMIで行われたアート展示会。白いタオルには各問題に対する思いが描かれている。我々学生も参加し、写真左は実際に書いたものである。展示にはNuclear Clubの学生が調べまとめたマーシャル諸島の核の歴史が年代ごと、島ごとに丁寧にまとめられている。写真中心は第五福竜丸事件についてまとめられている。第五福竜丸は英語でLucky Dragonと呼ばれており、現地の人もその言葉で認識している。

展示の最後には「Questions by PI 260 students」と書かれたボードがあり、現地の学生たちの疑問が置く寄せられていた。中でも印象的だったのは「なぜ自分たちの島が実験の土地として選ばれたのか」という質問である。島国だから、植民地だから、太平洋の遠い国で実験する側の国から離れているから。しかし、それらは正当化されて良いものではない。マーシャル諸島では、検診と称されていたにも関わらず、核による人体の影響を調べるために人が派遣されておりその事実が明らかにされるまでもに時間がかかり人々は大きな不安を抱えながら過ごすことになった。現在も保障不十分で多くの人が訴えている。核の問題は人権の問題でもある。

3.1 Exhibition

3.1に向けて、マーシャル音楽のステージやアート展示等の企画が盛り沢山。



↑2024/02/29 3.1Exhibitionマーシャルアインラズリゾートの様子

3.1を迎える前日、マーシャルアイランズリゾート（以降MIR）のプールサイドにてアート展示が行われた。セレモニーでは気候変動に訴えるセリーナさんが詩を披露。写真左上は核問題や気候変動、マーシャル諸島の様々な問題に立ち向かう若者の団体JO_JIKUM（ジョージクン）のメンバーが絵に表現した核や気候変動である。これまで、マーシャル人々は絵や歌など“文化”“芸術”で問題に向き合っている場面を見てきた。アートで問題を訴えるという斬新な活動に見える。マーシャル語はもともと文字が存在しない。昔から何かを“伝える”という行動は、言葉や絵であったという。だからこそ、現地の人々は教科書など文字にするのではなく日常で触れられてきた芸術を用いて訴えるのだ。

会場では、マーシャル特有の音楽が演奏され非常に盛り上がっていた。日本からは、シンガーソングライターの瀬戸麻由さんがステージを借り、核廃絶を願って作られた自身の楽曲「Colorful World」を披露。美しいピアノの音と、瀬戸麻由さんの歌声が混ざり思いが真摯に伝わる時間となった。

人物紹介：瀬戸 麻由（せとまゆ）さん

広島出身で広島のカフェ「ハチドリ舎」でスタッフであり一方でシンガーソングライターとして活動しながら核の問題に向き合い続けている。

ギャラリー



左上：特別授業後小学生とバレーで遊ぶ
左下：日本人の方が経営するお店MJCC
中央下：インドソケイ
右：CMI
右下：エヴェレンさん家の猫

次回予告



- ◆行進 - PARADE
- ◆MEMORIAL CEREMONY
- ◆マーシャルデジタルアーカイブス
- ◆伝統工芸品“あみもの”
- ◆ギャラリー
- ◆マーシャル諸島新聞vol. 4 予告

ついに、3.1 Remembrance Dayの当日を迎えました。現地で行われた行進やセレモニーに学生みんなで参加しました。3.1、核に対する様々な思いを持った人たちが一同に集う様子は日本の8月とはまた違う雰囲気を持っていました。次号はそんなマーシャルの一部と、伝統工芸品“あみもの”をご紹介します。

